

## 『フライハイト』紙に見られる革命観

—一八七九—一八六年—

田中ひかる

はじめに

これまでアナーキズム史研究者たちは、ヨーロッパのアナキストたちが一八八〇年代に革命の早期到来を主張していたと指摘してきたが、そのような主張が何を根拠になされていたのかを明らかにしてこなかった。他方W・リーブクネヒト(一八二六—一九〇〇)は八六年にアナキストを次のように批判した。——「意志は無から革命を創造しうる」とアナキストは主張する。だが「ハンス・モストが七年前から望んでいる革命」は起きていない。なぜなら、革命が起きるには「意志」だけでなくそれ相応の「状況」が必要だからだ、と。このよう

主張したとする見解は、その後一部の研究者たちによっても示されてきた。<sup>(1)</sup>

しかしながら当時のアナキストたちの主張を実際に検討すれば、彼らが「意志」だけでなく現実に起きた様々な事件を根拠にしながらか革命の早期到来を主張していたことが確認できる。以上の事実を筆者はドイツのアナーキズム派の週刊紙『フライハイト Freiheit』を分析する際に指摘したが、<sup>(2)</sup>そこでは以下の点を十分に明らかにできなかった。①革命の早期到来論は何を根拠に正当化されていたのか、②革命勃発から革命派が勝利するまでの過程は同紙上でどのように描かれ、いかなる論理により正当化されたのか、③それらの主張の歴史的背景とはどのようなものだったのか。そこで筆者は本稿で、同

紙上に掲載された革命に関する様々な議論を検討し、以上の問題を明らかにするとともに『フライハイ』紙上で展開された革命観の具体像を明らかにする。ただし、イマーケット事件以降、同紙の発行地であるアメリカではアナーキストに対する弾圧が始り、また同紙の編集者であるヨハン・モスト（一八四六—一九〇六）が投獄されるなど、『フライハイ』を取り巻く状況は大きく変化するため、本稿で扱う時期は八六年四月までとする。

一 「状況」と革命の早期到来論

先述したリーブクネヒトの批判とは裏腹に、『フライハイ』紙上に見られる革命の早期到来論は、同紙が創刊された一八七九年一月以来常に当時の様々な「状況」を根拠に主張されていた。例えば同年四月に同紙上に掲載された記事では次のような「革命の条件」が列挙され、革命の早期到来が主張されていた。——現代は「革命の時代」である。「世界恐慌」、「人民を物質的、精神的に破壊する極端にまで推し進められた軍国主義」といった「革命の条件」が今日至る所存在する。自由を奪われたドイツ人民は、軍備拡大のための保護関税の導入、タバ

コ税の引き上げ、物価高騰などによっていつかは困窮に追い込まれるだろう。この事だけでも彼らが我々のプロバガンダに敏感になるに十分である。「困窮は幾世紀間なされなかったことをたった一日で実現する」。今こそプロバガンダに最良の時期ではないか、と。

また同年十月に同紙上では次のように主張されていた。——凶作と穀物関税のせいで穀粉とパンの価格は極めて高くなった。バイエルンでは政府により麦芽の値段が倍にされてビールが高価になった。かつてはこうだった。このようにドイツの現状は一八四六・四七年の状況に酷似している。だから「改善された四八年」はそれほど遠い将来のことではない、と。こうして、凶作、物価高騰などを根拠に同紙上では四八年革命の再来が唱えられたのである。さらに翌十一月、『フライハイ』紙上では「飢餓チフス」がシュレージエンで発生した事実と国内の社会状況の悪化という問題が結びつけられて以下のように主張された。——国中至る所で凶作だ。輸入穀物はピスマルクの関税で高くなっている。それ以外の食糧価格も同様に上がるだろう。だが賃金は下がっている。だから行

動する必要があるのだ。シュレージエンでの「飢餓チフス」とドイツ全土での物価高について、工場、街頭、広場で語るのだ。寸暇を惜しまずアジテーションを行なえ。不満な人々の一群を作り出せ。彼らはみるみるうちに「革命兵士の一部隊」に変わり、いづれ諸君の主人が住む「宮殿」を破壊する時が来るだろう、と。「飢餓チフス」とは、「物価高騰と凶作」の後に主に「貧困地域」で多数発生した発疹チフスに当時つけられていた名称である。それゆえその発生は、社会状況が悪化したという主張を根拠付けるものになりえたのであろう。

このように『フライハイト』紙上では様々な事実が社会状況の悪化の根拠にされ、それらのいくつかは四八年の革命前夜の状況に結びつけられながら、革命が近いうちにドイツで勃発すると主張されていた。こういった議論の形式そのものは、その後同紙が八二年十月末にアナキズム路線を採択し、さらにその発行地をニューヨークに移した同年十二月以降も基本的には変化しなかった。ただし、革命勃発が間近だという主張の根拠としてはその後、先に挙げた物価高騰や「飢餓チフス」といったもの以外にも様々な事実が引き合いに出されるのだが、こ

れについては後述する。

ところで前述したリープクネヒトの言葉だけに注目すれば、革命の到来が間近だという主張は八〇年代のドイツにおいて極めて異常なものだったとも考えられるのだが、しかしながら他の同時代人の見解を参照すると、革命の早期到来という『フライハイト』派による予測が当時において極めて例外的なものだったとは断言できなくなる。この同時代人とは『フライハイト』派に敵対したA・ペーベル(一八四〇—一九一三)であり、周知のように彼もまた八〇年代にエンゲルスへの手紙の中で革命の早期到来を繰り返し明言していた。例えば八一年、自身が間近で観察したシュレージエンとラウジッツの状況を根拠にペーベルはこう主張した。——もはや経済は回復せず恐慌は慢性的である。そして恐慌はある日何かをきっかけにして「大崩壊」へと向かうのだ、と。また彼は八四年に、「ブルジョワ急進派」の議席が実はドイツ社会主義労働者党を支持する有権者の票によって支えられているという事実を根拠に、社会主義が実現される以前にまず「ブルジョワ急進派」が政権を握るなどという事態はドイツではありえないとエンゲルスに反論し、そ

れと同時に、自分たちは「革命」に向かって急速に近づいているのだから、議会では社会的根本的な変革を要請する決議案を提出し、「大恐慌」が来た時に頼れるのが自分たちだということを「大衆」に知らしめる必要があると主張した。さらにペーベルは八六年に、各国で労働運動が高揚していることを根拠にして次のように主張した。——国際的で大規模な「変革」は、自分がこれまで期待してきた以上に早い時期に起きるだろう。我々は「破局」に向かって進んでいるのでありそれは今世紀中に起きるだろうと私は言ってきたが、これを聞いた我が党の国会議員たちの大部分は私を嘲笑してきた。だが彼らも、私が正しかったのではないかと次第に考え始めているのだ、と。

ペーベルの主張と『フライハイ』紙上の革命観とを比較することは本稿の課題ではないが、両者に共通する特徴を一つだけ挙げるとすれば、様々な事実を引き合いに出しながら革命の早期到来を主張するという議論のスタイルであろう。ただしペーベルは当時、「生産手段」がどのような形で「収奪」されていくかは状況次第で様々な場合がありうるのだと主張して、「収奪」の過程

に関しては具体的な像を描こうとしなかった。したがって、エンゲルスへの手紙の中で「革命」あるいは「破局」という言葉で表現した事態を、ペーベルがどのようなものとして想定したのかは不明なのである。

他方、このようなペーベルによる漠然とした「革命」の像に比べると、当時『フライハイ』紙上で描かれていた革命勃発からそれ以降の革命のプロセスについてのイメージはより具体的だったと言える。そこで以下ではまず、革命の勃発が同紙上でどのようなものとして想定されていたのか、またそれがいかなる論理により正当化されていたのかを見ていくことにする。

## 二 革命の勃発と「反逆の精神」論

八二年十二月、シカゴで演説した際にモストは次のように主張した。——ドイツの労働者は、議会などあてにせず「政治的、財政的、経済的破産」に向けて「準備」している。また最近ウィーンでは労働者と警察・軍隊が衝突した際、現場近くの住人たちが兵士と警官に石を投げつけて労働者との連帯を表明した。もしこの事件が「政治的性格」を持っていたなら、「人民の怒りの爆発」

は一つの街区に止まらず大都市で起こり今頃は革命に発展していたに違いない。フランスではすでに拳銃があちこちで発射され、礼拝堂が吹き飛ばされ、ダイナマイトが「見栄っ張りの美食家ども」のど真ん中で爆発している。ロシアでは官僚が腐敗し財政破綻が起きており、革命は目前である。そこでは労働者が組織を作り、農民が貴族に立てつき、知識人が「ニヒリスト」と同様に思考するようになった<sup>(10)</sup>、と。このようにモストは革命の到来が間近だという主張の根拠を、まず各国の政治・経済的「破綻」と運動の展開に求め、さらに革命の勃発がヴィーンで起きた小さな暴動の延長線上にあるものだと主張している。ただし同時期に彼は、革命家が革命を「作る」ことはできないとも主張していた<sup>(11)</sup>。ではモストが支持したダイナマイトを爆破させたりする人々と、彼が主張した革命の勃発とは彼自身の革命観の中で一体いかなる関係にあったのだろうか。この問題を考える上で極めて重要なのが、当時『フライハイト』紙上に掲載された論説、「反逆の精神」において展開された主張であると筆者は考える。そこで以下でこれについて見ていきたい。

P・クロボトキン(一八四二—一九二一)による無署名

名の論説「反逆の精神」はまず八一年に『レヴォルテ Le Revolte』紙上で、次いで八三年に『フライハイト』でそのドイツ語訳が連載されたが、その内容は以下のようであった。——革命の前提は政治・経済状況の悪化であるが、それと同時に重要なのは人民に「反逆の精神」があることだ。革命が切実に希求される時代には、支配秩序に対する様々な批判があらゆる場でなされる。だがフランス革命はこのような「言葉」が「行動」に転化したからこそ勃発したのであり、これをもたらしただの「一握りの少数派」による言葉や「行動」による不断のアジテーションだった。大衆は当初これに無関心だったが、ある時から突然彼らの間で「少数派」への支持が増大し始め、しかも革命家を「模倣」する人々による「抗議行動、暴動、復讐」が日に日に増加したのである。他方、革命勃発前夜には、ピラ、誹謗文書、ポスターなどが政府を粉砕する方法を示して人民の士気を高揚させた。つまり「革命的状况」や「不満」がある一方でこのようなアジテーションがあったからこそ、人民はますます威嚇的になったのであり、幾つかの小規模な蜂起が「大革命」へと転化しえたのだ<sup>(12)</sup>、と。

ここではフランス革命前夜の「歴史」として革命勃発の経緯が描かれているが、それと同時に展開されているのは八〇年代の革命戦略として読みかえることも可能な独自の革命論であり、これを筆者は本稿で便宜上「反逆の精神」論と呼ぶことにする。ただし『レヴォルテ』からこの記事が転載される以前から『フライハイ』では、「蜂起や暗殺、あるいは暴力に対する抵抗やその他の英雄的行動」によっても過去に起きた革命は「加速」されたという見解が示されていたから、その時点で「反逆の精神」論は両紙の支持者たちの間で共有されていたと考えることができる。それゆえモストもまた、「行動」などが「反逆の精神」の覚醒に寄与するという「反逆の精神」論を前提にしていたからこそ、革命を「作る」ことはできないと主張しながらも「行動」を支持したのである。

ところでそのような「行動」は当時『フライハイ』紙上で「行動によるプロバガンダ」とも呼ばれていたが、この言葉には様々な事件を背景にして様々なイメージが与えられていた。例えば八三年八月に同紙に掲載された巻頭論説では、まずヴィーンで起きた警察・軍隊と労働

者とのいざこざが「行動によるプロバガンダ」だったとされ、さらに次のように主張された。——すべての革命に先行するのは数え切れない「小競合い」である。これが増大すればそれだけ、人民は街頭に出てそれらを間近で見る機会を得る。それと同時に彼らは、そういった経験をを通じて「危険」に慣れ親しむようになり、その結果、やがては「騒ぎ」が「総蜂起」へと転化する日が来るのだ、と。

これ以外にも「行動によるプロバガンダ」もしくは「行動」という言葉には農村での蜂起や街頭デモ、さらに暗殺やダイナマイトによる爆破などといった様々なイメージが与えられていたのだが、いずれにせよ「行動」がプロバガンダとして効果を発揮するという確信の一つの拠り所が、「反逆の精神」論で示されていたような革命勃発とこれに至る過程についてのイメージだったのは確かであろう。ただしそのイメージは革命観全体のなかの一部分でしかないと同時に、革命派が勝利した直後の状況に関するイメージとも密接に結びついていた。そこで次に、そのような革命派が勝利した直後の状況がどのようなものとして想定され、それがいかなる論理により

正当化されていたのを見ていきたい。

### 三 「教訓」に基づく革命観

八二年十二月にモストはシカゴでの演説で、過去の「過ち」から得られた「教訓」に基づいて、革命派が勝利した直後から革命の過程はいかに展開すべきかを次のように論じた。——旧制度を操ってきた人間に被害を与えなければ、旧制度はすぐに息を吹き返してきた。また、これまでの革命では「美辞麗句を並べ立てる連中」に「臨時政府」を作らせて人民は武器を手放しさえしたが、その帰結は反動勢力の復活だった。だからある都市で戦闘に勝利した後には、「独裁」が「革命軍」に委ねられねばならない。他方で全プロレタリアートの武装や武器の製造が開始され、さらに「野戦軍」が組織される。敵が立ち直って諸都市を砲撃する前に、彼らを全滅させねばならないからだ。この「戦争」を遂行するために重要なのはまず資金である。パリ・コミューンの時にパリの銀行にあった金は使われなかった。だから、まず銀行を「革命基金」にすることが次の革命で実施される重要な措置の一つである<sup>(16)</sup>、と。

以上のように、勝利した革命派による弾圧の過程として描かれた革命観はパリ・コミューンなどから「教訓」を得るといふ形で正当化されていたが、このような主張はすでに『フライハイト』がアナーキズム路線を採択する以前から、以下のように繰り返しなされていた。——革命に勝利した直後に革命派は武器を手放さず、敵を最後の隠れ家まで追いつめて全滅させねばならない。さもないと「七一年のヴェルサイユのブルジョワども」と同様、敵が我々に対してこの「血生臭い原則」を適用するだろう。だから権力を握った「革命軍」は「テロリズム」を実行しなければならない<sup>(17)</sup>。——パリ・コミューンは地方都市を反乱に向かわせるために何もなかったが、そのためには議会でなく少人数で構成される「執行部」や地方に派遣されて反乱を指揮する人々が必要だったはずである。そうすれば「コミューン連合」が成立して革命勢力の結集がなされていだろう。さらに「恐怖政治」が実行されていれば「反動」はたたきつぶされていだろう<sup>(18)</sup>。——コミューンは強力な執行権力を作らず、銀行を接收せず金持ちからも財産を没収しなかった<sup>(19)</sup>、など。また八二年九月には、歴史上の「経験」を将来の革

命にかさねばならないとして以下のように主張された。——革命が大都市で勝利した後、以下の措置が実施されねばならない。すなわち、食糧の押収、生産組織の結成、都市の要塞化、全プロレタリアートの武装と「野戦軍」の結成、あらゆる反動に対する「テロリズム」などである。<sup>(20)</sup>

こういった記事が掲載された背景としてまず考えられるのはパリ・コミューンに参加した人々と『フライハイ』派との交流である。例えば同紙上にはロンドンに亡命していたブランキ派が七四年に発表した宣言文が掲載され、<sup>(21)</sup>また八一年二月、成功した「革命」には「陰謀家」の参加が不可欠だったとする記事の中で以下のように主張された。——七〇年九月にスタンでの敗北が伝えられると、パリの人民はまたもや街頭に飛び出した。だが「革命的陰謀家」はいなかった。あるコミューン参加者がかつて我々にこう言った。あの時に五百名の「陰謀家」がいたなら、彼らによって大衆が指導され、さらに「赤い共和国」の樹立が宣言されていただろう、と。

ただし、こういった「教訓」が常にパリ・コミューンだけから引き出されていたかと言えば、必ずしもそうで

はない。例えば、E・N・ガンツは八一年に『フライハイ』紙上で次のように述べていた。——ブリュッセル、パリ、サラゴサ等での戦闘の「経験」に基づいて軍事専門家が認めるところでは、「勇氣ある決然とした住民」に対し、正規軍はティエールがやったようにその拠点を都市の外側に置かない限り対抗できないのだ、と。ただしガンツはモストとは異なり、「野戦軍」による敵の追撃や、革命勢力によって実行されるべき政治的・経済的な措置が何かという問題には触れず、もっぱら爆発物から毒ガスに至るまでの様々な「兵器」を市街戦で使用せよと主張し、これを次のような論理で正当化した。——

「真の人間性」とは「戦争」を迅速に終わらせることなのであり、そのためであればいかなる手段も正当化される、と。<sup>(22)</sup>つまり革命に際して「兵器」を使用することはパリ・コミューンなどの「経験」によってだけでなく、革命が「戦争」であるという立場からも正当化されているのである。

こういった「兵器」の中で、当時『フライハイ』紙上で重視されていくのがダイナマイトであり、同紙上で描かれる革命観においてもダイナマイトはやがて重要な

役割を与えられることになる。そこで以下では革命に関する議論からいったん離れ、当時ダイナマイトに対して大きな期待がかけられた歴史的背景について、同紙上に掲載された記事を中心に考察したい。

#### 四 ダイナマイトへの期待とその背景

『フライハイト』紙上でニトログリセリンとダイナマイトの製造方法を解説する記事が初めて掲載されたのは八三年一月であった。ただしそこでは、特殊な器具や純度の高い材料の使用を前提として製造方法が解説され、しかもその記述は詳細とは言えず、それゆえ知識や経験のない人々がこの記事を理解してダイナマイトの製造にとりかかることができたかは極めて疑わしいのである。<sup>(24)</sup>

また同年四月には導火線の代わりに薬品を用いた時限爆弾の製造方法を解説した記事が掲載されたが、これは「アイデア」の域を出ないものだった。<sup>(25)</sup>このように、当時わかりやすく爆発物の製造・使用方法を解説できる人物が『フライハイト』の支持者の中にいたという証拠を、同紙上に掲載されたダイナマイトに関する記事から見つけ出すことはできない。つまりダイナマイトの製造や使

用は、訴えられていただけで実行には移されていないか、たと考えることも可能なのである。

それにもかかわらず当時同紙上ではダイナマイトの威力に対して大きな期待が表明され、例えば八三年五月には、ダイナマイトはわずかな材料で簡単に製造でき、しかもこれを用いた攻撃に対しては軍隊も無力だなどと主張されていた。<sup>(26)</sup>ダイナマイトに対するこうした極めて楽観的な期待が表明された背景としては、『フライハイト』側にダイナマイトに関する知識がなかったということ以外に、とりわけ八一年三月に起きたアレクサンドル二世暗殺がダイナマイトにより達成されたことが重要である。だが八三年以降の同紙の論調を考えるとより重要なのは、当時アイルランド独立を武力によって勝ち取るうとしていたフィーニアンがダイナマイトによる爆破戦術を実行に移していたという事実である。特に彼らやその支持者の議論により『フライハイト』側は触発されていたと考えられ、例えば八三年五月、同紙上には武装蜂起によるアイルランド独立を主張するメツェロフが書いたパンフレットの一部が連載され、そこでは例えば次のように主張されていた。——「生命と自由」を守るた

めであれば、いかなる兵器の使用も正当化される。だから列強はすでにダイナマイトを戦争で使用したのであり、それゆえイギリス人がアレキサンドリアで行なったように、アイルランド人はダイナマイトでロンドンを攻撃してもかまわないのである。ただし「百万のドイツ兵」と「百門のクルップの巨砲」を用いるより安上がりで効果的なのは、五十名が各自百ポンドの「トリグリセリン」のつまった「ブリキ缶」を、他の五十名が強力な発燃剤をロンドンの市内各所で点火することだ<sup>(27)</sup>、と。

ここで、この議論に『フライハイト』側がなぜ共感したのかを考えてみたい。まず強力な発燃剤による放火やダイナマイトによる爆破という戦術は、当時の一般の人々によってさえ、極めて大きな威力を発揮するものとして認識されていたと考えられる。例えば六十七年十二月にロンドンで起きた監獄爆破事件の直後にイギリス政府の主要省庁では、爆発物による、あるいは強力な発燃剤の一種と考えられていた「フィーニアン<sup>(28)</sup>の火」による攻撃が引き続いて起こると危惧されたため、消化用に砂が準備されたばかりか床にまかれもしたという。他方でこれらの戦術に使用される「石油とダイナマイト」は、い

わば破壊の象徴として当時の『フライハイト』紙上にしばしばひとまとまりになって現れていた。例えばある詩で「石油とダイナマイト」は「暴君」と戦うための武器であり「支配」をなくすために「金持ちとその財産」を破壊するものだ<sup>(29)</sup>と賞賛され、またモストは演説で、各国の社会主義者が「火薬と鉛、石油とダイナマイト、劇薬と短剣」を信頼するようになっていると主張した<sup>(30)</sup>。こういった主張の背景としては、まずパリ・コミューンの後に石油が一般に放火の象徴になったことが挙げられるが、さらにダイナマイトの発明者A・ノーベル（一八三三—一八九六）が彼の兄弟とともにバクー油田開発にかかわっていたという事実も挙げられるのではないかと筆者は推測する<sup>(31)</sup>。このノーベルとの関連は推測の域を出ないが、いずれにせよ「石油とダイナマイト」の威力に対して『フライハイト』紙上で大きな期待が表明されていたのは確かであり、他方で当時一般の人々でさえダイナマイトや石油等が極めて大きな破壊力を持つと認識していたと考えられるのである。

しかもメツェロフはイギリスの兵器工廠で実験済みだった石油等が混合された発燃剤と、火薬の「九十三倍」

の威力を持つという「トリグリセリン」を用いることを根拠に、たった百名でロンドンを破壊できると主張した。その上彼は、南北戦争で様々な兵器が使用された例や自身のカリミア戦争での従軍体験などを根拠に、あるいはダイナマイトでイギリス軍が「アラビア人」の民家を住民もろとも吹き飛ばしたのだと主張して、こういった兵器を「戦争」で使用することを、そしてそれによって「罪のない人々」さえ犠牲になることをも正当化したのである。したがって、「石油とダイナマイト」の威力に対して大きな期待を表明し、しかも革命を「戦争」と規定していた『フライハイト』側がメツェロフの主張に共感したのは当然であろう。その上、当時フィーニアンがイギリス各地でダイナマイトによる爆破事件を起こしていたため、『フライハイト』派がそれらの事件から影響を受けながらメツェロフの議論に共感していた<sup>(32)</sup>ということとは十分に考えられるのである。いずれにせよ、八三年以降に同紙上で表明されたダイナマイトに対する大きな期待は、当時のフィーニアンの行動や主張から『フライハイト』派が何らかの影響を受けた結果であると考えて間違いない。

だが、他方で同年秋頃から『フライハイト』紙上ではドイツなどで起きた爆破事件も報じられ始め、しかもドイツ語圏で「行動」が続発すると、同紙上での革命観はこういった事件を媒介にしてさらに詳細に描かれていくことになる。そこで、再び同紙上で展開された革命観に話を戻して以下で見たい。

##### 五 「行動」と革命観

八三年十月から『フライハイト』紙上ではヨーロッパ各地で起きたダイナマイトによる爆破事件が報じられ、そのうちロンドンで起きた地下鉄爆破事件は大きな被害をもたらしたとして特に賞賛された。しかしながら他方では、ダイナマイトの量が少なく人命を奪うことができなかつたばかりか、建造物の損害さえ軽微だったと指摘された事件も少なからずあった<sup>(33)</sup>。したがってこれらの事件の観察を通じて、ダイナマイトの威力に対してそれまで自らが下してきた過大な評価に『フライハイト』側が修正を加えていったとも考えられるのである。

それでも「行動」そのものの効果に対する期待は、八三年秋からドイツ語圏で続発した以下のような事件によ

って強められていく。まず十月、フランクフルト警察本部での爆破事件が、次いで十二月にはヴィーン郊外で起きた警部射殺事件とシュトゥットウガルトの銀行で起きた強盗殺人事件が、それぞれ犯行声明と共に報じられた。こうした一連の事件をうけて翌年初頭の同紙上では次のように主張された。——昨年末に「行動によるプロバガンダ」を推奨した我々に対し、テロを実行すれば運動は衰退するという反論がなされた。だがドイツ語圏では「行動」が実行されて成果を挙げているのである。(35)

これに加えて同年二月、次のような事件が報じられる。——ヴィーン郊外で警察の密偵を射殺して逮捕された人物は、逮捕される際に拳銃で応戦し、さらにダイナマイト爆弾で追っ手もろとも自爆しようとした。(36)と。モストはこれらの事件を引き合いに出して、今後次々に「行動」がヨーロッパ各地で起こるだろうと主張した。(37)

このように、一連の事件は「行動」に対する『フライハイ』側の期待を高まらせたが、それだけでなく革命勃発に際して革命家が果たす役割を具体化することにも貢献したと考えられる。なぜなら先述したモストの発言が掲載されてから三週間後、同紙上には次のような記事

が掲載されたからである。——革命の勃発が不可避であり間近に迫っていると確信する者は、ダイナマイトから劇業に至るまでの入手可能な武器で武装する必要がある。「とてつもない恐慌」などが起こり人民が憤って街頭に飛び出した時、すべての大都市にいる「数百名の思考し、決然とし、そしてよく組織された革命家」は戦闘における「前衛」を形成する。ただし将来の戦闘は旧来のバリケード戦ではない。まず革命家はそれまでに照準を合わせてきた「人類の敵」のいる自宅、事務所、工場、商店、教会などに近づいて彼らを「処分」する。これが大都市の百ヶ所で同時に起き、それと同時に五十ヶ所で放火が行なわれ、その間に電信・電話網が破壊される。こうして社会全体は混乱に陥るが、他方で「革命への情熱」をかきたてられた人民は革命家を「模倣」し、家賃の不払い、地主の処刑、工場の占拠と工場長の処刑を実行する。つまり街頭での闘争ではなく、それぞれの建物の中での「個別の闘争」だ。こうして革命は勝利するだろう。(38)

この主張で注目すべきは、まずバリケード戦に代る「新たな戦術」として「個別の闘争」が提案されていることであり、それと同時にこれまで『フライハイ』紙

上で提案されてきた様々な革命戦術が従来の革命観に組み込まれているということである。例えば、同時に百ヶ所で「行動」を起こして五十ヶ所で放火を実行するという戦術は、メツェロフの主張から採用されたと考えてよいであろう。また電信や交通手段を破壊するという戦術は、すでに八二年に『フライハイト』紙上で提案されていた<sup>(39)</sup>。他方で、ここで具体化された「人類の敵」に近づく革命家のイメージは、ドイツ語圏で「行動」を起こした人々の姿から得られたと考えられる。というのも、先に述べた密偵射殺事件の犯人が死刑に処せられた直後、ニューヨークで開催された追悼集会でモストは次のように述べたからである。彼のような人物が千名いれば三月で革命が成立する。なぜなら彼らによる「個別の行動」が社会を破壊へと追いやるからだ<sup>(40)</sup>、と。

ところで以上の革命観は、バリケード戦では正規軍に對抗できないという新たな認識を前提として展開されたものであったが、新たな認識に基づくという点では八四年九月の『フライハイト』紙上に現れた次のような記事も重要である。——これまで爆破が数多く実行されてきたにもかかわらず失敗が続いている原因は、ダイナマイ

トの威力が過大に評価されてきたことにある。堅固な建造物を破壊するためには最低五〜十ポンドのダイナマイトが必要である。しかも建造物内部の壁や柱あるいは四隅にしかけねばならない。点火に最適なのは鉱業用の雷管である。導火線を雷管に接続した後、雷管の口をつぶして導火線を固定するのである、と。つまりここでは、ダイナマイトの威力に対する過大な評価がこれまでの失敗につながっていると指摘され、それと同時に堅固な建造物の破壊という具体的な目的のためにより実用的な知識が披露されているのである。このような記述が可能となったのは、この時までにモストがダイナマイト工場とその製造方法などを学んでいたからだと考えられる<sup>(41)</sup>。さらに当時彼は爆弾や発燃剤などに関しても知識や技術を会得し、それらを八五年の前半に同紙上に掲載された記事の中で明らかにした上、同年七月にこれらの記事をつなぎあわせてパンフレット『革命兵学』を発行するのである。

ここではこのパンフレット全般に関して考察できないが、革命観との関連で注目すべきは同書でなされた以下のような主張である。——「人民蜂起」が起きる時には

武装した十分な人数の革命家が必要である。我々のスロ  
ーガンは次のように要約できる。「万国のプロレタリア  
ート、武装せよ。いつでも行動できるよう武装せよ。戦  
闘の時は近い」と。この主張から読み取れるのは、革命  
は今後いつでも勃発しうるのであるから、革命家の武装  
が不可欠だという認識である。他方で同書が出版される  
直前の八五年六月から『フライハイ』紙上では、革命  
の「前哨戦」はすでに始まっているなどと主張されるよう  
になる。このような主張は、より大規模な形での革命の  
勃発が目前であるという切迫感が極めて強いという点で、  
本稿の第一節で見た革命の早期到来論とは異なる性格を  
持つと筆者は考える。以下ではこういった主張がどのよ  
うに展開され、また革命観といかなる関係にあったのか  
を明らかにする。

## 六 革命の「前哨戦」

『革命兵学』にその後使われることになる記事が『フ  
ライハイ』紙上に掲載され続けている間、同紙上では  
ヨーロッパやアメリカ各地で起きていたストライキや暴  
動などが次々に報じられていた。これらの記事を見れば、

モストらが様々な事件をいかなる論理に基づいて、どの  
ように解釈していたのかがわかる。例えばイリノイ州で  
起きた石切り工のストライキについては、次のように論  
じられていた。——導入された州兵との衝突で労働者側  
には死傷者が出た。また州兵は労働者の家に侵入して  
「乱暴狼藉」をはたらいた。その結果、平和的なストラ  
イキに参加していた者の多くが憤慨して一日で「暴力革  
命家」になり、武装が必要だと考えるようになったのだ  
と。そしてこれと同様の記事が掲載されていくなかで、  
六月終わりの『フライハイ』紙の巻頭論説では以下の  
ように主張されたのである。——「革命はすでに始つて  
いる」。各国の労働運動には、不満、不公正に対する憤  
慨、略奪されているという自覚、そしてそういった害悪  
を排除したいという衝動が認められる。日々伝えられる  
のは、この衝動を「物理的な力の行使」として表明する  
試みである。これに対しては恐ろしい弾圧が加えられて  
いるが、ここ一週間で起きた「戦闘」には注目すべきも  
のがある。ベルリンの石切り工は警察と争い、プリュン  
でも「戦闘」が起きて多くの労働者が死傷した。同じ日  
にマドリッドでは資本家に雇われた「武装衛兵」たちと

プロレタリアートとの間で「街頭戦」が展開された。これに加えて各地で絶え間なく「小競合い」が起きている。さらに、一方では「陰謀」、革命的ポスター、新聞、デモ、集会、あらゆるアジテーションがあり、これに対して他方では、スパイ、家宅搜索、監禁、有罪判決、追放がある。こういったもの全てが「社会革命の前哨戦」なのだ、と。<sup>(44)</sup>

同様の見解は翌八六年二月に同紙上に掲載された以下のような記事にも見られる。——フランスのある都市ではバリケードが築かれ、ロンドンでは多数の商店が破壊され、警官が襲われたり窓ガラスが割られたりした。ペンシルヴェニアのある炭坑町では坑道に火がつけられ家々が破壊され、他方でロシアでは農民蜂起が起きている。これらが全てここ一週間で起きたのである。またアメリカ各地では、労働組合の空念仏に愛想をつかした「組織されていない人々」が街頭に飛び出している。これら全ての「荒々しい行動」の原因は「空腹、失業、困窮」にほかならない。さらに「これまで存続してきたものは全て没落してしかるべきだ」という考えが彼らを街頭に向かわせた。その帰結が全てを破壊する「社会革

命」の勃発なのだ、と。<sup>(45)</sup>

以上で見てきた議論に読み取れるのは、実際に起きた事件が革命勃発に不可欠である「反逆の精神」を覚醒させる契機、もしくはその表出だとする見方である。このような見方が導き出されたのは、「反逆の精神」論で想定されている革命観の枠組みにそって様々な事件が解釈されたからだと考えられる。

ただし、他方では実際に起きた事件から革命戦術が導き出されて革命観に組み込まれもしていた。そこで最後にそのような主張を、以下で見たい。例えば八六年一月の『フライハイト』紙には、次のような記事が掲載された。——最近フランスの幾つかの都市で起きたストライキで、労働者はスト破りではなく「搾取者」を捕まえて攻撃し、またその所有物を破壊し、さらに職場を放棄せずに工場を占拠した。これらの行動の目的は依然として賃上げにすぎず革命そのものではない。だが実行のほどを示したこの戦術は、いずれ絶大な威力を発揮するだろう。従来のようにバリケード戦に固執すれば敗北は必至である。だが人民が仕事場や倉庫、住宅を占拠して経営者などに対して戦闘を開始すれば、敵対勢力はあ

らゆる方面で窮地に立たされ、軍隊もまた突如これらに包囲されることになるのだ。もちろんある日いっせいに蜂起が起きることはありえないから、いくつかの都市を占拠した後に革命家は戦闘を継続する。他方で住宅の占拠や工場の接収は戦術としてだけでなく、蜂起した人々を「アナキー」の中に置き換えるために有効に機能するだろう。だから工場の労働者たちは、即座に「自由な生産グループ」を組織するのである。こうして「主人のいない仕事場や工場」が「自由な社会における自由な組織の基礎」となるだろう、と。

また同年四月、ベルギー各地で同時多発的にストライキや暴動が起きていると報じられた際にも、そこから次のような「教訓」が引き出されていた。——ベルギーの労働運動は「社会革命の勝利」に近づきつつある。ただし現在起きている蜂起はばらばらで相互に連携がないため、敵につけ入る隙を与えている。ここから、訓練・武装した革命家たちによる「中核」が事前に必要だという「教訓」が得られる。彼らは各地の武器庫を襲えるだけの勢力であり、「決定的な瞬間」に「前衛」を作り、蜂起した人々に「正しき道」を指し示す数百の「決然とし

た」人々でなければならぬ、と。

以上のような主張から、『フライハイ』紙上の革命観が、当時起きていた様々な事件から多大の影響を受け、しかも部分的に変更を加えられていったことが明らかとなる。例えば革命の勃発とその後の状況に関しては、それまで革命家による「行動」、あるいは「戦争」や「テロリズム」にだけ焦点があてられて論じられてきた。だが工場や住宅の占拠という戦術が革命観に組み込まれたことにより、革命の勃発とそれ以降の状況は「自由な組織の基礎」が創設される過程としても想定できるようになったといえる。他方でベルギーの暴動は、革命勃発のイメージをより具体化することに貢献したであろう。したがって『フライハイ』紙上で展開された革命観が、ヘイマーケット事件が起きる八六年五月以降にも変容していったことは十分に考えられるが、これについては別の機会に考察したい。

おわりに

以上述べてきたように、「意志」だけが革命をもたらすなどという主張は『フライハイ』紙上に見出せず、

そこで主張された革命の早期到来論の根拠をなしていたのはペーベルの主張においてと同様、まず「状況」や運動の高揚などであった。ただし同紙上では、政治・経済状況の悪化だけでなく、一握りの革命家によるプロパガンダにより人民の中に「反逆の精神」が形成されることもまた革命勃発の重要な要因だとされていた。それゆえこの主張だけに注目すれば、『フライハイト』では革命勃発の要因として「意志」の重要性が強調されていたと言ふこともできよう。しかしながら他方では、「前哨戦」が開始されているという主張が根拠にしていたのもまた、「反逆の精神」が「物理的な力の行使」として同時多発的に表出されているという「状況」だったのである。したがって、こういった主張において「意志」と「状況」のどちらが重視されていたのかなどといった問題を設定しても意味がないのであり、むしろ重要なのは、『フライハイト』派以外のアナキズム派や、あるいは社会民主主義派などによっても示されていた当時の様々な革命観と比較しながら、『フライハイト』紙上で展開された革命観の個別的で具体的な姿を歴史的文脈に即して明らかにしていく作業であらう。

(1) 革命の早期到来論に関しては cf. Nettlau, M., *Anarchisten und Sozialrevolutionäre*, Berlin 1931, rpt. [*Geschichte der Anarchie*, Bd. 3], Vaduz 1984 [以下 Nettlau], pp. 225, 243. もとづいて、喜安朝『革命的サンティカリスム』一九八二年、七十一頁参照。リーフクネヒトの主張に関しては cf. Vetter Niemand [Liebknecht, W.], *Trutz-Eisenstein*, I [1886], (*Sozialdemokratische Bibliothek*, 24), London 1889, p. 9. その後示された同様の見解については cf. Lösche, P., 'Anarchismus. Versuch einer Definition und historischen Typologie', *Politische Vierteljahresschrift*, 1974, p. 56; Lösche, P., *Anarchismus*, Darmstadt 1977, rpt. 1987, p. 133; Hobsbawm, E. J., 'Was kann man noch vom Anarchismus lernen?', *Kursbuch*, 19 (1969), pp. 47-57.

(2) 拙稿『革命的少数派』としてのアナキズム運動』下村由一・南塚信吾共編『マイノリティと近代史』一九九六年、一〇六頁参照。『フライハイト』に関しては cf. *Freiheit* [以下 FR]: [副題] Sozialdemokratisches Organ, 4. 1. 1879-21. 8. 1880 London; [副題など] 28. 8. 1880-3. 6. 1882 London; [実際の発行地はスイス。副題など] 8. 7-18. 11. 1882 London/Exeter (14. 10-18. 11. 1882); [副題] Organ der revolutionären Sozialisten, 9. 12. 1882-27. 6. 1885 New York; [副題] Internationales Organ der Anarchisten deutscher Sprache, 4. 7. 1885-



- Blanguet, Frankfurt/New York 1986, pp. 525 ff. トノンキ派との関係についての「拙稿「愛護」三八八頁以下三九七頁の註(28)を参照。
- (22) 'Verschwörung-Putsch-Revolution', *FR*, 26. 2. 1981.
- (23) Cf. Dr. E. N.-G., 'Revolutionäre Kriegswissenschaft', *FR*, 8. 1. 1981. の記述をキムンビ画注をた「トナーキムン *The Anarchist*」紙の論議をたつて。「戦争」に關して cf. Dr. E. N.-G., 'Inhumane Kriegsführung', 13. 11. 1980; 'Das Geld und die Revolution', *FR*, 21. 8. 1981. Ganz に関して cf. Becker, H., 'The Mistry of Dr Nathan-Ganzi', *The Raven*, 6 (October 1988) [21-Becker], pp. 118-45.
- (24) 'Wissenschaftliche Winke', *FR*, 20. 1. 1983. の記事にはその日録に補記説明をなした「ヤリ」は技術や知識がなされた後には困難のあるもの専門家に再発せよのよびを「職業的な難問」をたつた。Cf. 'Der Nitroglycerin', 'Die Redaktion der "Freiheit"', *AVIS!*, *FR*, 30. 6. 1983.
- (25) 'Praktische Winke', *FR*, 14. 4. 1983. たまたま同様の討論を雑誌にのこした「前」はロンドンで発表してつた。Cf. Short, K. R. M., *Dynamite War*, Dublin 1979 [21-Short], p. 106.
- (26) 'Dynamit', *FR*, 5. 5. 1983.
- (27) Cf. 'Fuelleiton: Prof. Mezeroff, Dynamit gegen Gladstone's "Hilfsmittel der Zivilisation"', *FR*, 26. 5. 2. 6, 9. 6, 16. 6, 23. 6, 30. 6. 1983. Mezeroff に関して cf. Avrich, P., 'Conrad's Anarchist Professor', *Labor History*, Summer 1977, pp. 397-402; Short, pp. 116, 218 ff.
- (28) Cf. Short, p. 15.
- (29) Cf. 'Petroleum und Dynamit', *FR*, 18. 11. 1982. のこと Henry Glasse (cf. Nettlau, p. 369.) によれば「石油の歴史」をたつた「石油」は「石油」。
- (30) 'Most's Rundreise in Amerika', *FR*, 6. 1. 1983.
- (31) Cf. 'Petroleum', in: *Brochhaus' Conversations = Lexikon*, Bd. 12, Leipzig 1885, p. 868; *Nobel*, Schück, H./Sohlman, R. (Hg.), Leipzig 1928, pp. 39 ff., 47.
- (32) Cf. 'Der Boden wankt', *FR*, 24. 3. 1983; 'Aus Allen Welten' [21-'AAW'], *FR*, 7. 4. 1983; Short, pp. 50-6, 104-6.
- (33) 'AAW', *FR*, 31. 10. 10. 11. 1983; 'Von Nah und Fern' [21-'VNUF'], *FR*, 22. 12. 1983.
- (34) 'AAW', *FR*, 31. 10. 1983; 'Zur Propaganda der That', 24. 11. 1983; 'VNUF', *FR*, 22. 12., 29. 12. 1983.
- (35) 'Zur Propaganda der That', *FR*, 12. 1. 1984.
- (36) 'Wetterleuchten', *FR*, 2. 2. 1984.
- (37) 'Internationale Arbeiter-Assoziation', *FR*, 16. 2. 1984.
- (38) 'Neue Kriegstaktik der Revolution', *FR*, 8. 3. 1984.
- (39) 'Die Revolution naht!', *FR*, 4. 3. 1982. のこと *Der*

- Rebell*, Dezember 1881 に掲載された同誌の論文からの抜  
きである。その著者はオットー・フォン・メーケルである。cf.  
*Neulan*, p. 313; *Becker*, p. 137.
- (42) 'Ecce Homo!', *FR*, 16. 8. 1884.
- (43) 'Anarchistische Winke', *FR*, 27. 9. 1884; *Neulan*, p.  
382.
- (44) Mosl, J., *Revolutionäre Kriegswissenschaft*, [New  
York 1885], pp. 58 ff.
- (45) 'VNUP', *FR*, 9. 5. 1885.
- (46) 'Vorposten-Gelechte', *FR*, 27. 6. 1885.
- (47) 'Es dämmert!', *FR*, 13. 2. 1886.
- (48) 'Revolutionäre Kriegstaktik', *FR*, 9. 1. 1886.
- (49) 'Vom Kriegsschauplatz', *FR*, 3. 4. 1886.
- (50) (一橋大学助手)